

平成 26 年度 第 2 回 釧路湿原エゾシカ対策検討会議
議事概要

1. 平成 26 年度調査結果等の報告について

・資料 1-1 平成 26 年度エゾシカ採食状況調査 実施結果

委員	P2 以降のデータは、柵外のデータか。柵内の変化はどうであったか。
事務局	柵外のデータ。柵内は、設置後 1 年目でほとんど変化はない。
委員	柵の耐久性はどうか。
事務局	初年度のものあまり良くなかったため、改良して継続使用できるようにした。
委員	湿原内部の調査があまり進んでいない。推進費調査と情報共有をして調査方法（策の形状等）を確立させていく必要がある。調査開始時期が遅い。
委員	釧路湿原ならではの種に着目してはどうか。
委員	希少種のみではなく個体数調整が始まる前のゼロデータを記録しておくことが重要。その後、対策に沿ってモニタリングしていくことで傾向が見えることが期待される。
委員	P5 の雪の影響と採食の傾向が明らかになってきている。掘れる積雪深の時は、湿原内部も利用している。特に高層湿原で顕著というのは重要な知見。

・資料 1-2 平成 26 年度達古武地域エゾシカ試験捕獲に 実施結果

委員	くくりワナの改良は、具体的にどのようにしたのか？
事務局	独自の工夫としては、踏込を深くした。農林技術研究所 森林・林業研究センター大橋さんらが開発した、カラ落ち防止を強化したのものも試用した。
委員	大型&小型のトリガーは、どのようなものを使用したか。
事務局	モバイル通信を使用して、web カメラ、ネット経由で扉を落下させる操作を行った。
委員	昨年度に比べて今年の方が捕りやすかったか？
事務局	捕獲されたシカをワナ内に一晩留置しておいても、周辺のシカの警戒心が上がった様子が見られないなど、昨年度より捕獲しやすい印象はあった。雪も多かった。
委員	2 年目で、担当者がワナの運用に慣れたからという理由ではないのか。
事務局	担当者らは、こうした捕獲の経験が 5 年以上あり、昨年度と今年度の間で運用に慣れたから、とは思われない。
委員	くくりワナは、他の地域と比べてどうであったか。
事務局	例えば、足寄などの気温が低く雪がサラサラしているようなところと比べると、重たい雪が降ったり、降った雪が融解と凍結を繰り返すので、その違いはあった。
委員	2 月 4 日に捕獲された個体をすべて放獣した理由は？

事務局	GPS 首輪を装着する目的で麻酔したが、体重が低く装着ができなかった。麻酔したため、肉としての有効活用に適さないため、耳標を装着して放逐した。
委員	小型囲いワナで捕獲された個体が、有効活用施設に搬入されなかった理由は。
事務局	小型囲いワナで捕獲された個体に損傷があって、今回受け入れてもらっている有効活用施設の受け入れ基準を満たさなかったため。ワナ壁を目隠しすることで、損傷は押さえられた。工夫によっては、有効活用は可能。
委員	止めさしは、ポケットネットで電気ショックを使用するのが最善であったか。
事務局	作業者の精神衛生上は、それがいいと考えられる。

・資料 1-3 平成 26 年度エゾシカテレメトリー調査 実施結果

委員	達古武湖南岸で捕獲ができなかった理由は。シカがいないからか。
事務局	いないわけではないが、北岸の南向き斜面に比較すると少ない。いる場所もあるが、捕獲しにくい場所であった。
委員	ハンノキ林は沼沢林ではないのでは？ここでは、下にヤチボウズがあるようなイメージと思われるが、英語圏では、常に浸水しているイメージだが。用語の整理が必要ではないか。
事務局	環境省植生図の分類に従っている。英語化する際には、検討。
委員	GPS 装着したエゾシカを放逐したら関係機関に連絡して、撃たないように、また撃った場合にも連絡をして欲しい旨周知してもらいたい。
委員	日中は湿原内、夜間はカラマツ林で過ごすという結果は、これからの捕獲計画、捕獲地の選定に重要であるため、今後もデータの蓄積が重要。

2. 平成 27 年度事業計画（案）について

・資料 2-2 環境研究総合推進費「釧路湿原にて超高密度化状態となったシカの管理を成功させる戦略と戦術」平成 27 年度事業計画（案）

委員	航空センサスのデータは 2 月後半。夏には分布が変わる。夏には航空センサスは適さないので、ライトセンサスや自動撮影で行うしかない。
委員	対策は、コッタロ、タッコブ、右岸堤防が核心になるのではないか。
委員	2012 年には、森林隣接地域に多かった。
委員	右岸堤防は、GPS 首輪のデータから堤防道路からの距離を見ると、夏の夜に個体数調整を行うのがいいのでは。ただし、タンチョウに配慮が必要。
委員	湿原内の生息密度など増加傾向が明らかになった。このままでは、生態系への影響が増加するのは確実である。環境省、林野庁、道庁などが連携して対策を講じてほしい。

・資料 2-1 平成 27 年度環境省事業計画(案)

委員	大型囲いワナの適地はどこか。
事務局	今年度の大型囲いワナの場所は、麻酔銃によって捕獲された個体は利用していないことが分かった。苗畑周辺に設置すれば、網羅できるのではないか。
委員	コッタロで個体数調整をするという計画はないか。
事務局	現在は、推進費で調査研究が行われているので、影響することを懸念する。将来的に、また、研究期間中でも要望がある場合には検討する。
委員	個体数調整は、達古武と右岸堤防でのみ考えるのか。
事務局	核心部のシカが分散して近隣の森林に行っているということが明らかになって、そういった場所で捕獲することが核心部の生態系保全につながるということであれば、他の場所も検討できる。本事業と推進費事業とで、対策をどこで行うかということ意識しながら連携して行う。
委員	来年度に GPS 首輪個体を増やす計画はあるか。
事務局	現時点ではないが、必要であれば検討する。
委員	道東各地で捕獲され GPS 首輪を装着した個体が、夏の生息地として標津に移動している。そこでの対策は考えていないか。
事務局	現時点では考えていない。
委員	推進費では、来年度も 10 頭に GPS 首輪を装着したいと考えている。適地はどこかあるか。
事務局	6 月には GPS 首輪装着個体が夏の生息地にほぼ到着すると思われるので、その結果を待って検討するのがいいのではないか。但し、湿原内部の核心地域で越冬している個体に GPS 首輪を装着することは、克服すべき課題はあるが検討しなくてはいけないと思う。
委員	どこでどのくらいの個体数調整をすれば、湿原植生も含めて保全できるという議論がされて出口が示されるのか。季節移動や天候などによる年変動もあるので難しいことはわかるが、仮説をたてて進めて行かないといけないのではないか。
委員	現時点では、仮の目標設定をして順応的管理を行っていくしかない。植生指標を参考にすると、5 頭/km ² で植生が改善されている知床が参考になるが、釧路は解放個体群なのでさらに複雑で難しい。推進費の 3 年間では難しいが、そのための道筋はつけていく。地域の関係者も含めて議論を始めることが必要だと考えている。
委員	シカによる生態系への影響軽減のための個体数調整は、夏の生息地ですべきか冬の生息地ですべきか。
事務局	現時点では、高層湿原での採食、樹皮剥ぎ、河岸の土砂崩れなどの影響を考えると、冬の生息地がいいのではないか。この点について、整理と議論が必要。
委員	今後の調査でドローンが使用できる可能性はないか。

事務局	目的によるが、充分ある。
委員	人工林の被害を、捕獲前後で比較しているか。
事務局	自然再生事業の中で行っている。
委員	捕獲しやすい場所で安易に銃を使った捕獲を始めると、核心部にシカが移動して対策ができなくなる可能性がある。慎重に対策を練るべき。
委員	将来的には、達古武の間伐は終了する。知床でも4～5年目から捕獲効率が落ちてきた。次のステップとして、次の捕獲適地を検討するという視点も必要。
委員	北海道型小型囲いワナも活用しては。

3. その他

- ・資料 3-1 釧路湿原生態系維持回復事業について
- ・資料 3-2 釧路湿原自然再生全体構想

委員	シカは公園内外を利用しているが、この生態系維持回復事業の対象地は国立公園内に限られるのか。
事務局	自然公園法の中の制度なので自然公園内に限られる。必要性があれば調査は可能。捕獲は難しいので、公園外に関しては関係機関と連携して知恵を使って行う。
委員	1980年を目標でいいのか。ラムサールではそれが難しいとなったのでは。
事務局	ラムサールは理想的には1960～70年代だが現実的には80年代ということになってそう記載されている。本事業でも80年代のようなという記載にしたい。
委員	是非、エゾシカも生態系サービスとして扱うように考えてほしい。
委員	本年度第1回検討会でも策定についてお願いした。原案はすでにできているようなので、他省庁等関係機関との調整も含めて進めてほしい。
委員	各調査・研究が進んだことによって、より明確に書ける部分があると思う。相談しながら進めてほしい。(4月初めまでなら変更可)
委員	林野庁も植生保護策の設置や捕獲事業を行っている。調査結果の共有をしていただき、対策に有効に活用したい。